

## 青梅マラソンの社会学的研究

藤原 健 固

## A Sociological Study of the Ohme Marathon Race

Kengo FUJIWARA

In this monograph, the present author surveyed the runners in the Ohme Marathon Race and considered its background from the sociological viewpoint. The data was collected by the research on its actual conditions: a 37 item questionnaires were distributed to 3,950 respondents on Jan., 15, 1982, and 822 samples were taken for this purpose. The main findings of this study were as follows.

- (1) They participated in the Ohme Marathon Race for the purpose of maintaining their own health without making any excessive effort.
- (2) They showed the image of typical contemporary men, i. e., they were satisfied with present situation in spite of having unrest feeling for future, and in such a situation they showed interest in hobby, sport, and health.
- (3) "Running" has merits not only for physical health, but also for mental and social lives. That was the reason why many people were taking it in their daily lives in spite of its non-rule and non-competitive nature, and try to find themselves in it.

## 1 研究視点

現代社会はその構造と機能をますます複雑にしており、もはや、ひとりひとは社会の網の目をはなれて生活し得ない。そこから、社会を構成するひとりひとりの成員は、個人ではどうしようもないほどのプレッシャーを受けざるを得ないのである。こうした状況のなかで、個人の主体性が叫ばれ疎外の克服が望まれているのである。

そのために、実に多くのことが言われ実行に移されてきた。スポーツもその例外ではない。ときには、スポーツこそが、というスポーツ万能論さえみられないわけではないのである。しかし、殆どのスポーツは、種目ごとに観察して

みると、時と場所とルールに支配されていると言えなくもないのである。いわば、管理された状況のなかで、優劣が競われているのである。それは現代の管理社会と一脈相通ずるものであり、何らかの拘束のもとに成立するものである。<sup>(1)</sup>

こうした管理された現代社会のなかであって、多くの人々が「走ること」<sup>(2)</sup>に関心を示し、且つ、実行するのは何故であろうか。それは管理された状況から開放されることではあるまいか。時間と場所と種々の規範・価値の支配から逃れて、それらをわがものとし新しい自分の世界を見出し、主体性をとり戻す、ことに「走ること」が大きく関与しているものと考えられるのである。

本稿では、こうした観点から「走ること」が現代社会でどのような意味をもっているのか、について調査結果をもとに考察するのが目的である。具体的には、①の「走ること」の実態を明らかにし、②「走ること」の社会的背景を生活意識との関連で把握したうえで、③現代社会において「走ること」がどのような意義をもっているか、について考察する。

その際、調査結果の分析をもとに考察をすすめるが、調査は次の要領で実施された。<sup>(3)</sup>

(A)被調査者 昭和56年度青梅マラソン参加者15,761名のうち無作為抽出法により、3,950名にアンケートを求め、サンプルとして採用したのは822名(20.8パーセント)であった(表1)。

(B)調査時期 昭和57年1月15日—同3月20日。

(C)調査方法 郵送法によるアンケート調査。

(D)調査内容 「スポーツと生活基礎調査」(37項目)。

## 2 調査結果からみた「走ること」の実態

### ① SES からみた参加者

(A)年齢 「40歳以上45歳未満」(18.2%)が最も高く、つづいて「30歳以上35歳未満」(17.

9)、「45歳以上50歳未満」(13.5)、「50歳以上」(9.2)、「20歳以上25歳未満」(8.5)、「20歳未満」(2.3)という割合であったが、「50歳以上」のものが9.2パーセントを占めていたことが注目される。

(B)性別 「男性」が圧倒的に多く86.6パーセントを占めていた。

(C)職業 「専門技術職」(26.6)と「事務職」(20.9)が高く、ついで「管理職」(11.8)、「単純労働者」(11.1)、「販売業」(5.4)といった割合であった。

(D)年収 「400万以上450万未満」と「500万以上650万未満」を除いて、ほぼ平均化(10.0~11.8)されていた。

(E)学歴 「専門学校以上卒」(42.1)と「高卒」(40.1)が高く、ついで「中卒」(11.8)という割合で、学歴の高いものの方が参加率も高かった。

以上、参加者の傾向をSES((A)~(E))からみたところ、①男性>女性、頭脳労働者>肉体労働者、高学歴者>低学歴者という傾向が認められた。しかし、②全体としては、ほぼ平均化されていた。

こうした参加者の傾向について、凡そ次のことが考えられる。まず、①の点については、管理社会からもたらされる種々のプレッシャーを

表1 被調査者内訳

(%) N=822

年 齢	20歳未満	20歳以上 25歳未満	25歳以上 30歳未満	30歳以上 35歳未満	35歳以上 40歳未満	40歳以上 45歳未満	45歳以上 50歳未満	50歳以上			
		19(2.3)	70(8.5)	134(16.3)	147(17.9)	115(14.0)	150(18.2)	111(13.5)	76(9.2)		
性 別	男	女									
	712(86.6)	110(13.4)									
職 業	専門技術職	農林漁業	事務職	管理職	販売業	運送業	単純作業	その他	無職	無回答	
	219(26.6)	14(1.7)	172(20.9)	97(11.8)	44(5.4)	22(2.7)	91(11.1)	122(14.8)	35(4.3)	6(0.7)	
年 収	150万未満	150万以上 200万未満	200万以上 250万未満	250万以上 300万未満	300万以上 350万未満	350万以上 400万未満	400万以上 450万未満	450万以上 500万未満	500万以上 650万未満	650万以上	
	82(10.0)	89(10.8)	97(11.8)	95(11.6)	66(10.5)	84(10.2)	60(7.3)	93(11.3)	64(7.8)	72(8.8)	
最終学校	尋常小学校	中学校	高等学校	専門学校	短期大学	大学	その他	無回答			
	23(2.8)	96(11.8)	330(40.1)	62(7.5)	40(5.6)	238(29.0)	24(2.9)	9(1.1)			

表2 都道府県別参加者

N=15,761

北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重
84	20	53	88	63	56	223	265	211	247	1,956	983	7,771	2,327	159	23	30	9	115	141	7	327	119	40
0.53	0.13	0.34	0.56	0.40	0.36	1.41	1.68	1.40	1.57	12.41	6.24	49.31	14.76	1.01	0.15	0.19	0.06	0.73	0.93	0.11	2.07	0.76	0.25
滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	鳥取	島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	計
23	33	113	84	21	15	3	9	30	20	30	10	6	15	4	22	2	3	3	6	0	2	2	15,761
0.15	0.21	0.72	0.53	0.13	0.10	0.01	0.06	0.19	0.13	0.19	0.06	0.04	0.10	0.03	0.14	0.01	0.02	0.02	0.04	0.0	0.01	0.01	0.01

表3 全体的にみた“走ること”の実態

(イ) 走る歴史	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満
	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
(ロ) 大会参加	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満	6ヶ月未満
	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
(ハ) 走る距離(週)	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満	30キロ未満
	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)	310 (37.7)
(ニ) 走る会所属の有無	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)	465 (56.6)
(ホ) 1人で走る割合	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント	100パーセント
	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)	283 (34.4)
(ヘ) どこで走るか n=1983*	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路	道路
	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)	687 (36.3)
(ト) 走る動機 n=1912*	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから	楽しそうだから
	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)	205 (10.7)
(チ) 走る妨げになっているもの	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない	時間に余裕がない
	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)	368 (69.6)

※...複数回答 N=822

ルール性、競争性に乏しい「走ること」のなかで受け止め、ほんらいの自己を取り戻そうとする社会的欲求がみられるのではないか、ということである。すなわち、「走ること」によって自由に振るまう時間と空間をつくり、そこにはほんらいの自己を垣間見て、その魅力にとりつかれるものと考えられるのである。

つぎに、②の点については、国民的レベルでの2つの側面が考えられる。1つは経済的格差が小さいことであり、2つは思考・行動様式のワンパターン化である。

(i) 経済的格差 我が国の経済的格差はそれほど大きくない。国民の大部分は自己を中流の中以上と位置づけており、現実の不満を持ちながらもその多くは、少なくとも、意識の次元で或る程度の満足感を抱いているのである。スポーツとりわけ、健康を意識して「走ること」において経済的な障害はそれほどないのである。

(ii) 思考・行動様式 我が国は単一民族によって構成されているといっても、それほど過言ではない。このことから国民の考え方、ものごとの処理の仕方に共通する部分が非常に大きい。加えて、勤勉性はともすると没个性的ともいえる流行をもたらず。「走ること」は、そのことを楽しみ、且つ何かに役立てようとする国民性に合致したものである。

ちなみに、都道府県別の参加者（全員）の割合は、表2のとおりであった。

② SES からみた参加者の日常生活における「走ること」の実態

(a) 全体的にみた「走ること」の実態

全体的に参加者の日常の生活のなかでの「走ること」の実態をみたところ、凡そ次のとおりであった（表3）。

(A) 走る経歴 「4年以上」のものが最も高く（60.6）、走る経歴が短くなるにつれてその割合も低かった。

(B) 大会参加の有無 順位を競うことを目的とした「走る」大会に参加した割合は高く、殆ど全員が以前にも参加経験をもっていた（未経験者0.7）。

(C) 走る距離 走る距離は「週30キロ以上70キロ未満」が最も高く（43.8）、ついで「週30キロ未満」（37.7）、「週70キロ以上100キロ未満」（13.4）、「週100キロ以上」（4.4）であった。

(D) 走る会所属の有無 何らかの「走る会」に所属していたものは、56.6パーセントであった。

(E) 1人で走る割合 多くのものは「1人で」走っており、75パーセント以上を占めていた。

(F) どこで走るか 「道路」（36.3）が最も高く、ついで「公園」（18.0）、「街路」（14.6）、「田舎道」（7.8）、「マラソン・ジョギング用道路」（6.7）、「学校の施設」（5.5）、「会社の施設」（3.1）などとなっていた。

(G) 走りはじめた動機 「健康のために」（36.5）が最も高く、ついで「大会に出たかったから」（13.1）、「他の人が走っているのをみて」（12.4）、「楽しそうだったから」（10.7）、「他のスポーツでは満足できなかったから」（6.9）などとなっていた。

(H) 走る妨げになっているもの 「妨げになっているものはない」としたものは52.7パーセントであった。そして、妨げになっているものがあるもののうち、その割合は「時間的余裕がない」（69.6）が圧倒的に高く、ついで「よい場所がない」（10.6）、「気持ちに余裕がない」（5.5）、「教えてくれる人がいない」（4.3）などとなっていた。

以上、8つの側面から、「走ること」の実態をみてきた。その全体像は、それほど無理をしないで「走ること」に取り組んでいると判断される。しかし、場所や時間の問題などを抱えていることも判った。

(b) SES からみた「走ること」の実態

年齢、性、職業、学歴、年収別に「走ること」の実態をみたところ、有意な差が認められたのは次のとおりであった（表4）。

① 年齢層別

(A) 走る経歴 若年層よりも中・高年層に「走ること」の経験が豊かであった。すなわち、「4年以上」の経歴をもっていたのは、「45歳以上50歳未満」（76.6）、「50歳以上」（77.6）であるの

表4 SESと“走ること”

	走る歴史	大会参加の有無	走る距離	1人で走る割合	走る会所属の有無	走る妨げになっているもの
年齢	**	**	*	*	***	*
性	***	***	***	***		***
職業				**	*	**
年収	**	**	*			**
学歴	*			*	***	

\* …… 5%で有意    \*\* …… 1%で有意    \*\*\* …… 0.1%で有意

に対し、「30歳未満」までのものは50パーセントに達していなかったのである。そして、走る経験年数が少なかったのは、総じて若年層に高かったのである。

(B)大会参加の有無 これまでに何らかの「走る大会」に出場した経験についても中・高年層に高かった。すなわち、「20回以上」出場した経験をもつ割合は、「45歳以上50歳未満」(43.2)、「50歳以上」(55.3)であったのに対し、「30歳未満」のものは25パーセント以下であった。

(C)走る距離 「週70キロ以上100キロ未満」走るものについてみたところ「50歳以上」のものが最も高く(23.7)、他のどの年齢層よりも約10パーセント以上上回っていた。そして、「週30キロ未満」走る割合は、「20歳未満」(63.2)、「25歳以上30歳未満」(50.8)、「30歳以上35歳未満」(42.2)、「45歳以上50歳未満」(24.3)、「50歳以上」(26.3)であり、若年層に高かった。

(D)走る会所属の有無 何らかの「走る会」に所属していた割合は、「50歳以上」が最も高く(82.9)、ついで「45歳以上50歳未満」(64.9)であり、年齢層が若くなるに従って低かった。

(E)ひとりで走る割合 「いつもひとりで走る」割合は、「40歳以上45歳未満」(40.0)、と「45歳以上50歳未満」(40.5)に高く、「50歳以上」は29.0パーセントであった。そして、「20歳未満」は26.3パーセントであった。

(F)走るのに妨げになっているもの 「妨げになっているものはない」と答えた割合は、「40歳以上45歳未満」(40.0)「45歳以上50歳未満」(46.9)、「50歳以上」(48.7)、と中・高年層に高かった。他方、若年層は「時間に余裕がない」

としたものが多かった(「20歳未満」(47.4)、「20歳以上25歳未満」(52.9)、「25歳以上30歳未満」(52.9)、「30歳以上35歳未満」(51.7))。

以上、年齢層から走る実態をみたが、総じて言えることは、若年層よりも中・高年層の方が「走ること」により積極的に取り組んでいることを示唆していた、ということであった。

#### ②性別

(A)走る経歴 「5年以上」走る経歴をもつ割合は、「男性」(66.2)、「女性」(23.9)であった。

(B)大会参加の有無 「20回以上」走る大会に出場した経験をもつ割合は、「男性」(36.1)、「女性」(10.9)であった。

(C)走る距離 「週70キロ以上100キロ未満」走る割合は「男性」(14.8)、「女性」(4.6)、「週30キロ以上70キロ未満」は「男性」(45.7)、「女性」(31.8)であった。そして、「週30キロ未満」は「男性」(34.0)、「女性」(61.8)であった。

(D)ひとりで走る割合 「ひとりで走るのは24パーセント以下」と答えたものは、「男性」(8.6)「女性」(26.4)であった。

(E)走る妨げになっているもの 「妨げになっているものはない」としたものは、「男性」(34.8)、「女性」(28.2)であった。そして、「ある」もののうち、「時間に余裕がない」と答えたのは、「男性」(44.9)、「女性」(43.6)でほぼ同じ割合であった。

以上の分析結果は、女性よりも男性の方が「走ること」により積極的である、ことを示唆している。

#### ③職業

(A)ひとりで走る割合 「いつもひとりで走る」

割合は、「運送業」(45.5)、「事務職」(41.3)、「管理職」(36.1)に高かった。

(B)走る会所属の有無 何んらかの「走る会」に所属している割合は、「農林漁業」(71.4)、「管理職」(67.0)に高かった。

(C)走る妨げになっているもの 「妨げになっているものはない」とした割合は、「無職」(40.0)、「技術工・生産工程作業者・単純労働者」(37.4)に高かった。そして、「時間的余裕がない」としたものは、「専門技術職」(51.6)、「農林漁業」(50.0)、「事務職」(50.0)に高かった。

以上の分析結果は、職業別にはそれほど顕著な特徴が認められないことを示している。

#### ④年収

(A)走る経歴 「4年以上」の経歴をもつものは、「650万以上」(76.6)、「500万以上 650万未満」(72.3)と高い年収のものに多く、年収が低くなるにつれて走る経歴も短いという傾向が認められた。

(B)大会参加の有無 「20回以上」大会に参加した割合は、「350万以上 400万未満」(46.5)、「650万以上」(45.3)であった。

(C)走る距離 「週70キロ以上 100キロ未満」走る割合は、「350万以上 400万未満」(19.8)、「250万以上 300万未満」(17.5)、「650万以上」(17.2)であった。また、「週30キロ未満」走る割合は、「200万未満」(52.4)、「無収入」(48.6)、「200万以上 250万未満」(48.3)であり、低い所得者に高かった。

(D)走る妨げになっているもの 「妨げになっているものはない」とした割合は、「500万以上 650万未満」(43.6)、「650万以上」(42.2)、「450万以上 500万未満」(40.0)となっており、年収の高いものに高かった。また、「時間に余裕がない」としたものは、「200万以上 250万未満」(50.6)、「200万未満」(47.6)、「400万以上 450万未満」(47.6)であった。

以上の分析結果は高い年収を得ているものが「走ること」に概して積極的であることを示唆している。

#### ⑤学歴

(A)走る経歴 「4年以上」の走る経歴を有す

る割合は、「尋常小卒」(69.6)、「中卒」(66.7)、「大卒」(74.7)、「各種専門学校卒」(62.9)、「高卒」(59.1)であった。

(B)ひとりで走る割合 「いつもひとりで走る」とした割合は、「大卒」(37.4)、「高卒」(35.8)、「短大卒」(34.8)、「各種専門学校卒」(33.9)、「尋常小卒」(30.4)、「中卒」(28.1)であった。

(C)走る会所属の有無 何らかの「走る会」に所属していた割合は、「尋常小卒」(87.0)、「中卒」(74.0)、「短大卒」(56.5)、「大卒」(50.8)であった。

以上の分析結果は、学歴によってそれほどの特徴を示していない、ことを示唆するものである。

以上5つの観点から日常生活での「走ること」の実態をみてきたが、総じて指摘できることは、次の3点であった。

①全体的に中・高年層>若年層という傾向が認められた。②男性>女性という関係が明らかであった。③職業と学歴は、それほど「走ること」に影響を与えていなかった。

### 3 「走ること」と生活意識

#### (1)全体的にみた「走ること」と生活意識

走ることの背景について、①余暇の実態と余暇観、②社会観、③人生観、④生活実感、労働観との関係でみたところ、凡そ次の如くであった(表5)。

##### ①余暇の実態と余暇観

まず、「余暇の使い方」についてみたところ、第1位は「趣味・教養・スポーツ」(63.5)であり、ついで「一家団らん」(11.3)、「仲間や友人と付き合う」(7.3)、「ラジオ・TV視聴」(5.6)、「明日に備えて勉強する」(5.1)となっており、「別に何もしないでゆっくり過ごす」は6.1パーセントであった。

つぎに、「仕事と余暇に対する考え方」についてみたところ、仕事と余暇併立型が最も多く(43.0)、ついで仕事志向(36.6)であり、余暇志向は6.6パーセントであった。

ちなみに、「仕事こそ生きがい」だとする割合は

表5 全体的にみた走ることと生活意識

(イ) 余暇観

(イ) 余暇の使い方 n=822	明日に備えて 勉強する	一家団らんで 過ごす	仲間や友人と つき合う	趣味・教養・ スポーツに使 う	ラジオ・TV の視聴	別になにもし ないでゆっく り過ごす	そ の 他 D.K
(ロ) 仕事と余暇に 対する考え n=816	仕事よりも余 暇に生きがい を感じる	仕事は適当に 片付けて余暇 を楽しむ	仕事にも余暇 にも同じくら い力を入れる	仕事の方に力 を入れる	仕事こそ生き がい	そ の 他 D.K	
	74 (9.1)	54 (6.6)	351 (43.0)	299 (36.6)	26 (3.2)	12 (1.5)	
(ハ) 自分の余暇の 使い方に対す る感想 n=822	だいたい満足 している	本当にやりた いことができ ない	もっと役立つ ことをしなけ ればならない	ひまもてあ ましている	いつも変りば えない	もつと楽しい ことがあるの ではないか	そ の 他 D.K
	411 (50.0)	179 (21.8)	127 (15.5)	11 (1.3)	37 (4.5)	47 (5.7)	10 (1.2)
(ニ) 余暇に何をし たいか n=2526*	TV・ラジオ の視聴	何もしないで 体を休める	スポーツをす る	勉強 (読書) をする	サイドビジネ スで増収を計 る	家庭サービス につとめる	そ の 他 D.K
	97 (3.8)	56 (2.2)	613 (24.3)	420 (16.6)	92 (3.6)	198 (7.8)	431 (17.1)
(ホ) 余暇の活用に 対する考え n=815	充分活用でき る	もてあます	わからない			奉仕活動をす る	旅 行 を す る
	514 (63.1)	215 (26.4)	86 (10.6)			144 (5.7)	431 (17.1)
※…複数回答							

(ロ) 社 会 観

今後の社会観 n=818	ひとりひとりの生き方や考え方が重視され、 はり合いのある生活ができる社会が実現する だろう		ひとりひとりの生き方や考え方が尊重されず、 生きがいのもてない社会になるだろう		そ の 他 D.K
	156 (19.1)	241 (29.5)	327 (40.0)	94 (11.5)	

(イ) 人 生 観

(イ) 心がけていること n = 2772*	支出を押え収入を増やす	550 (19.8)	趣味や楽しみを大切にしている	550 (19.8)	家族の和をくめる	358 (12.9)	人づき合いを大切にしている	448 (16.2)	359 (13.0)	仕事に精を出す	359 (13.0)	66 (2.4)	服装や持ち物に個性を出す	66 (2.4)	世の中に役立つことをする	149 (5.4)	健康に気を付ける	651 (23.5)	別に心がけていることはない	18 (0.6)	その他の D.K	16 (0.6)
	楽しく愉快に	243 (29.6)	将来の設計を立て着実に	257 (31.3)	まわりの人に愛され親しまれるように	148 (18.0)	152 (18.5)	社会に役立つように	22 (2.7)	他人は信頼できない	22 (2.7)	お互いに信頼しながら生きている	46 (2.7)	46 (2.7)	303 (18.0)	14 (0.8)	105 (6.2)	特にな	その D.K	その D.K	その D.K	
(ハ) 自分の人生に対する感じ方 n = 1681*	何をやるにもおっくうだ	20 (1.2)	何をやっても気持ちにハリがある	220 (13.1)	将来どうなるか不安だ	288 (17.1)	408 (24.3)	将来のことが楽しみだ(やればやるだけの実りはある)	277 (16.5)	友人・知人のつき合い	40 (4.9)	21 (2.6)	21 (2.6)	8 (1.0)	8 (1.0)	142 (17.3)	33 (4.0)	自分が向上させること	142 (17.3)	生きたいと感じるものはない	33 (4.0)	95 (11.6)
	仕事や勉強	78 (9.5)	家族	72 (8.8)	子どもの成長	122 (14.9)	210 (25.6)	趣味・スポーツなどの楽しみ	40 (4.9)	信 仰	8 (1.0)	8 (1.0)	8 (1.0)	8 (1.0)	8 (1.0)	8 (1.0)	8 (1.0)	自分を向上させること	8 (1.0)	信 仰	8 (1.0)	8 (1.0)
(ホ) 人間に対する信頼感 n = 812	有	473 (58.3)	無	187 (23.0)	D.K	152 (18.7)	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無
	有	473 (58.3)	無	187 (23.0)	D.K	152 (18.7)	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無

※…複数回答

(二) 生 活 実 感

(イ) 生活の満足感 n = 814	満足している	126 (15.5)	どちらかといえば満足している	427 (52.5)	どちらかといえば不満だ	222 (27.3)	33 (4.1)	不満だ	6 (0.7)	その D.K	6 (0.7)	391 (47.6)	391 (47.6)	371 (45.1)	42 (5.1)	18 (2.2)	労働の意味 n = 822	生活を持続するため	371 (45.1)	人としての当然のつとめを果すため	42 (5.1)	能力を発揮させるため	18 (2.2)	その D.K	18 (2.2)	
	とても苦しい	44 (5.4)	多少困る程度	314 (38.5)	少しはゆとりがある	396 (48.6)	41 (5.0)	ゆとりがある	20 (2.5)	その D.K	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)	20 (2.5)
(ハ) 5年以内に暮しは楽になるか n = 822	楽になるだろう	57 (6.9)	どちらかといえば楽になるだろう	158 (19.2)	変わらないだろう	203 (24.7)	228 (27.7)	どちらかといえば苦しくなるだろう	86 (10.5)	苦しくなるだろう	86 (10.5)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)
	楽になるだろう	57 (6.9)	どちらかといえば楽になるだろう	158 (19.2)	変わらないだろう	203 (24.7)	228 (27.7)	どちらかといえば苦しくなるだろう	86 (10.5)	苦しくなるだろう	86 (10.5)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)	85 (10.3)

(ホ) 勞 働 観

労働の意味 n = 822	生活を持続するため	391 (47.6)	391 (47.6)	371 (45.1)	42 (5.1)	18 (2.2)	能力を発揮させるため	42 (5.1)	18 (2.2)	その D.K	18 (2.2)
労働の意味 n = 822	生活を持続するため	391 (47.6)	391 (47.6)	371 (45.1)	42 (5.1)	18 (2.2)	能力を発揮させるため	42 (5.1)	18 (2.2)	その D.K	18 (2.2)



### 3.2 パーセントにすぎなかった。

さらに、「自分の余暇の使い方に対する評価」では「だいたい満足している」とする現状肯定型が最も高かった(50.0)。しかし、同時に、「本当にやりたいことができない」(21.8)とする現状否定型も少なくなかった。そして、「もっと役立つことをしなければならない」(15.5)、「もっと楽しいことがあるのではないか」(5.7)とする余暇活用志向型もかなり高かった。しかし、「ひまをもてあましていく」ものは、少なかった(1.3)。

それでは、「余暇を何に使いたいか」との質問に対する解答は、「スポーツ」(24.3)が最も高く、ついで「趣味」(18.0)、「旅行」(17.1)、「勉強(読書)」(16.6)、「家庭サービス」(7.8)などであった。ここで注目されるのは「ラジオ・TV視聴」(3.8)、「何もしないで体を休める」(2.2)といった消極的姿勢が低かったことである。そして、「奉仕活動」(5.7)への関心が認められた。

さいごに、「いま仮に、仕事や家事・勉強からはなれて、自由に使える日数が10日間あるとします。この10日間を、あなたは余暇として充分活用できると思いますか」という今後の余暇の活用に対する考え方を求めた結果、「充分活用できる」としたものは63.1パーセントであった。そして、「もてあます」としたものは26.4パーセントであり、「わからない」(10.6)を加えるとかかなりのものが将来の増大するであろう余暇の使い方に不安を抱いていることがわかった。

#### ②社会観

「あなたは、このまますすむとすれば、これからの社会はどのようになっていくとお考えですか」との質問に対して、「ひとりひとりの生き方や考え方が重視され、はり合いのある生活ができる社会が実現するだろう」と将来に希望を抱いていたものの割合は19.1パーセントであった。そして、「ひとりひとりの生き方や考え方が尊重されず、生きがいのもてない社会になるだろう」と将来に悲観的態度をもっていたものは29.5パーセントであった。また、「わからない」が40.0パーセントと高かった。このこと

は将来に対して明るい希望をもっているものの割合が、それほど高くないことを示唆している。

#### ③人生観

まず、「ふだん心がけていること」については、「健康に気をつける」(23.5)、「趣味や楽しみを大切にする」(19.8)、「人づき合いを大切にする」(16.2)、「仕事に精を出す」(13.0)、「家族の和をつくる」(12.9)などが高く、経済的関心としての「支出を押さえ収入を増やす」(5.7)はそれほど高くなかった。

また、「どのように生きるか」については、「将来の設計を立て着実に」(31.3)と「楽しく愉快地に」(29.6)が高く、ついで「社会に役立つように」(18.0)であった。

さらに、「自分の人生に対してどのように評価しているか」についてみたところ、かなり前向きに評価しており、「将来のことが楽しみだ。〈やればやるだけの実りはある〉」(24.3)が高かった。しかし、他方「将来どうなるか不安だ」とするものは17.1パーセントであった。

そして、「生きがいを感じるもの」として第1位にあげられたのは、「趣味・スポーツなどの楽しみ」(25.6)であり、ついで「自分を向上させること」(17.3)、「子どもの成長」(8.8)などであった。ちなみに、「生きがいを感じるものはない」と答えたのは、4.0パーセントであった。

さいごに、「人間に対する信頼の有無」についてみたところ、58.3パーセントが他人に信頼感をもっており、もたないものは23.0パーセントであった。ちなみに、「わからない」としたものは、18.7パーセントであった。

#### ④生活実感

まず、「現在の生活にどの程度満足しているか」についてみたところ、「どちらかと言えば満足している」(52.5)が最も高く、「満足している」(15.5)と合わせると68.0パーセントにのぼった。そして、「不満だ」としたものは4.1パーセントであり、「どちらかと言えば不満だ」(27.3)を合わせると31.4パーセントであった。

このことは、「現在の暮らし向きについてどのように感じているか」との質問に対応するものであり、「少しはゆとりがある」(48.6)が最も

高く「ゆとりがある」(5.0)ものと合わせると53.6パーセントであり、「多少困る程度」(38.5)と「とても苦しい」(5.4)を合わせると43.9パーセントであった。

そして、「5年以内に暮らし向きはどうか」との質問に対し、多くのものは「どちらかと言えば苦しくなるだろう」(27.7)と答え「苦しくなる」と答えたもの(10.5)と合わせると38.2パーセントに達した。そして、「どちらかと言えば楽になるだろう」としたのは19.2パーセントであり、「楽になる」(6.9)を合わせても26.1パーセントに過ぎなかった。ちなみに、「変わらないだろう」としたのは24.7パーセントであった。これらの調査結果は、将来の暮らし向きについて実際にはそれほど期待を抱いていないことを示唆するものである。

#### ⑤労働観

「人が仕事をもって働くのは何のためだと思えますか」という質問に対する解答の第1位は、「生活を維持するため」(47.6)であり、ついで「社会の一員としてのつとめを果たすため」(45.1)であり、必要性和義務感とその拠りどころとなっている一面をのぞかせていた。そして、「自分の能力を発揮させるため」としたのは5.1パーセントに過ぎなかった。

以上、5つの側面から青梅マラソン参加者の生活意識についてみてきたが、総じて言えることは次の7点であった。①現状の生活にかなりのものが肯定的態度をもっており、②毎日の生活をエンジョイすることに大きな関心が向けられており、③とくに健康に対する関心が強く、趣味・スポーツにも目が向けられていた。そして、将来に備えての勉強・学習への関心は、それほど高くなかった。また、④余暇をもてあましたり、生きがいの対象をもたないものは少なかった。さらに、⑤将来の社会にそれほど希望をもっているわけではなく、また、5年以内の暮らし向きにも大きな期待を寄せていなかった。しかし、⑥自分の人生に対してはその将来に期待を寄せており、他人を信頼する気持も高かった。こうしたなかで、⑦働く意味を生活の維持と義務感に求めたものが多く、自分の能力

を発揮させるとしたものは少なかった。

以上の7点をさらに要約すれば、将来に不安を残しながらも現状に満足し、そのなかで生活をエンジョイする現代人のイメージが浮かび上がってくる。そして、そのエンジョイする中味は、健康・スポーツ・趣味といったものを志向していた。

#### (2) 走ることからみた生活意識

走る経歴、大会参加の有無、走る距離、という側面から生活意識としての余暇観、社会観、人生観、生活実感、労働観をみたところ、有意な差が認められたのはつぎのとおりであった(表6)。

#### ①走る経歴

(A)余暇の使い方 日常の「余暇の使い方」について「趣味・教養・スポーツ」に当てるとした割合は、「6ヶ月以上1年未満」(100.0)、「4年以上」(65.9)、「3年以上4年未満」(60.9)であり、「6ヶ月未満」は最も低く50.0パーセントであった。また、明日に備えて勉強するとした割合は、「4年以上」(6.8)、「2年以上3年未満」(6.1)であった。

(B)自分の余暇の使い方に対する評価「だいたい満足」していた割合は、「4年以上」(52.6)、「6ヶ月以上1年未満」(50.0)、「3年以上4年未満」(48.7)であり、「6ヶ月未満」は33.3パーセントであった。また、「本当にやりたいことができない」とした割合は、「2年以上3年未満」(27.3)、「1年以上2年未満」(22.0)、「4年以上」(21.1)であった。さらに、「もっと役立つことをしなければならぬ」とした割合は、「6ヶ月未満」(33.3)、「3年以上4年未満」(19.9)、「4年以上」(14.3)であった。

(C)人間に対する信頼感 人間に対する信頼感について「有る」と答えた割合は、「6ヶ月未満」(83.3)、「4年以上」(60.8)、「3年以上4年未満」(57.1)、「2年以上3年未満」(50.5)、「1年以上2年未満」(42.0)、「6ヶ月以上1年未満」(37.5)であった。

#### ②大会参加の有無

(A)余暇の使い方 「趣味・教養・スポーツ」に日常の余暇を当てるとした割合は、大会参加

表6 “走ること” からみた生活意識

	余 暇 観					社会 観			人 生 観				生 活 実 感			労 働 観		
	余暇の使い方	労働と余暇に対する評価	方に対する余暇の使い	たいか今後余暇に何をしたいか	余暇は何に使うべきか	に活用できるか今後の余暇を十分に	将来の社会に対する考え方	5年以内にかわるか	ふだん心がけてい	自分の人生に対する評価	生きがいを感じるもの	人間に対する信頼感	情熱を注いでいるもの	自分の生活に対する満足感	暮らし向きについての評価	向きはよくなるか5年以内に暮らし	労働と余暇に対する考え	労働の意義
歩く経歴	**		**									*						
大会の有参加	**																	*
歩く距離																		*

\* …… 5%で有意

\*\* …… 1%で有意

回数が「10回以上20回未満」(71.6), 「20回以上」(66.9), 「これまではゼロ」(66.7)などが高かった。また, 「明日に備えて勉強する」と答えた割合は, 「これまではゼロ」(16.7), 「1回」(11.1), 「2回」(7.3)などが高かった。

(B)労働の意義 「生活を維持するため」と答えた割合で高い比率を示したのは「3回」(62.5), 「4回」(51.2), 「これまではゼロ」(50.0)などであり, 逆に低い比率を示したのは「20回以上」(43.5)にみられた。また, 「社会の一員としての役割を果たすため」と答えたのは, 「20回以上」(50.2), 「10回以上20回未満」(47.3), 「5回以上10回未満」(42.8)に高く, 「3回」(29.1)は低かった。

### ③走る距離

(A)労働の意義 「生活を維持するため」とした割合は「週70キロ以上100キロ未満」(50.0), 「週100キロ以上」(50.0), 「週30キロ未満」(49.0), 「週30キロ以上70キロ未満」(44.2)であった。また, 「社会の一員としての役割を果たすため」とした割合は, 「週30キロ以上70キロ未満」(49.2), 「週70キロ以上100キロ未満」(47.3), 「週30キロ未満」(39.1), 「週100キロ以上」(38.7)であった。

以上の分析結果から, “走ること” に積極的

なものも人生そのものにも積極的である, ことが示唆された。

## 4 “走ること” の社会的意義

### (1)現代社会の特徴

現代社会の構造と機能は, きわめて複雑である。この複雑さこそが前近代社会から近代社会への移行を証明するものである。とくに, 戦後のわが国における経済の著しい発展は, 社会の構造をより複雑にしその機能を飛躍的に増大させた。

それは鉄を中心とする重工業の発展を布石とする軽工業を含めての工業の発展に負うところが大きであった。そして, 資源小国日本の活路はバイオテクノロジーなどを駆使した知識集約産業へと動き, 現在の経済大国を迎えたのである。

その結果, わが国の労働力は工業に集約されてゆき, 多くのサラリーマンが誕生することになった。それは農業社会とことなり自らの労働力を時間で売ることを意味する。ここに, 労働時間と余暇時間が区別され, 余暇に目を向けざるを得ない社会的背景が現出したのである。今回の調査結果からも, 多くの人々が余暇に注目し, その活用に積極的姿勢をもって対処してい

ることが証明されたのである。

こうした状況は、知識集約産業の発展とともにますます深まりつつある。それは工業社会における画一化現象からもたらされる「部品としての労働力」からの脱皮を要求されているからに他ならない。そこでは、遊びとしての余暇が絶対条件であり、主体的人間が要求されるのである。

このような社会の流れは、所得の増大を背景に人類未踏の余暇社会の現出を予見させるものである。調査結果をみても、このことは示唆される事実である。すなわち、「ふだん心がけている」ことについてみたところ、経済的関心よりも「趣味や楽しみを大切にする」とか「健康に気をつける」、「人づき合いを大切にする」などといった余暇の使い方にかなり大きなウエイトがおかれていたのである。

しかしながら、同時に、「今後の余暇に対する活用」に対しては不安感も認められた。また、「今後の社会」にそれほど期待を抱いていなかったのも事実である。これらの背景には、現代社会の複雑な構造と機能のはざまに生きる現代人の不安が顔をのぞかせているものと考えられる。とりわけ、ここでは現代人の不安を個人、コミュニティ、社会の次元で考えてみたい。

まず、個人の次元で問題にされなければならないのは、疎外の問題である。疎外とは、人間が相互にコミュニケーションを失い本来の人間でなくなった状態を指す。それは2つの側面からもたらされるものである。ひとつは、経済的論理が過度に重視される社会にあって、人間が人間と向い合わず物と向い合うことから生ずるものである。言うまでもなく、物と向い合っている状態では人間との関係は断ち切れ、コミュニケーション不在の状況が作り出される。ふたつは、過度に管理される社会にあって、人間は管理の壁に遮られ、相互の関係を円滑に維持し得なくなる。こうした状況が、人間性を喪失させる作用をもち得ることは否定できないのである。

つぎに、コミュニティの次元で問題にされなければならないのは、コミュニティ崩壊 (com-

munity disorganization)の問題である。ほんらい、コミュニティはそこに住む人々が精神的肉体的社会的疲労を癒す場所である。ところが、現代社会の構造と機能の分化は、人間の精神的肉体的社会的側面の多くを自分のコミュニティの外に求めるようになった。すなわち、教育を受けることから経済活動、果てはレクリエーションにいたるまで他の地域に出かけなければならないという状況が一般的になってきたのである。

こうした状況は、共同体の成員相互の関係をより密にする同質結合を希薄にし、成員相互の差異を予想し個人の資質が優先される異質結合をもたらす。それはひとりのトータルな人間と人間との結合から部分的な結合の連続をもたらす。ここに、トータルな人間性は失われ、個人個人は切断され孤立化せざるを得ない状況が作り出されるのである。

それ故、異質結合からもたらされるこうした意味での部分的結合しかもたない人々が一定の場所に住んでみてもそれほど相互のコミュニケーションは確保されないのである。そして、コミュニティに愛着を示していこうとするコミュニティ感情 (community sentiment) も希薄にならざるを得ないのである。

さいごに、現代社会の複雑な構造と機能のはざまに生きる現代人の不安について社会の次元から問題にされなければならないのは、一時性という問題である。さきに、現代人は同質結合から異質結合へと移行し、その結果トータルな人間性は失われ部分的な相互の結合をしか期待できなくなってきた状況について述べてきたが、これを社会の次元に不遍した場合、一時性という問題に集約されるのである。

人間が自分の能力を媒介して他との関係をもつ現代社会において、相互の関係は人間の一部としての能力が媒介物となる。それは目標獲得の最短距離の方途として他の能力との交渉を求める、ということの意味する。それ故、目標が獲得されると別の目標獲得を目ざして別の能力との交渉が開始される。こうして、現代人の他との交渉は一時的となり、能力優先による目標

獲得が主題となる。

こうした関係は、根をもたない池の藻に似ている。藻は南から強風が来れば北に集まり、北からの強風に対しては南に集まる。一時性を余儀無くされる現代人は、根をもたない藻と同様の運命にある。何らかの社会的な力が働けば、それに多くのものは流される。ブームが来たり、去り、また来るのはこのためである。

それは、ひとりひとりが確固たるコミュニケーションのチャンネル（回路）をもたないことを意味している。

以上、個人、コミュニティ、社会の次元から現代人の不安の背景にあるコミュニケーションの欠如についてみてきた。こうした不安にもかかわらず、現代社会はますますその構造と機能を複雑化しつつある。そして、それはコミュニケーションの欠如をより増巾する方向にあるにもかかわらず、他方では相互のコミュニケーションをより確保しなければならない現実の状況をもつくり出しつつある。

それは端的に言えば、既述の工業社会から知識・技術集約産業を基礎とする情報化社会への移行を背景にしている。そして、このことは、同時に人間が「遊び」としても余暇を不可欠とする余暇社会への移行をも意味しているのである。

こうした観点から、余暇の重視が叫ばれ、主体的人間が期待されているのである。その際、スポーツ、レクリエーションが果たし得る役割に期待が寄せられるのであるが、「走ること」がひとつのキイを与えているものと考えられるのである。

## (2)なぜ「走る」のか

「走ること」は、人間の基本的動作である。そして、古今東西、老若男女を問わず「走ること」が行われてきたし、今後も行われるであろう。しかしながら、この人間の基本的動作は文明の進歩と共に減少してきた。とくに、同質結合から異質結合への社会的移行に伴ない、人々は目標獲得のためにより機能性を重視するようになった。それを支えてきたもののひとつが交通機関の発達である。

交通機関の発達は、人間が本来自分の力で移動することを機械に置き換えることを意味している。そこでは、当然のことながら、人間の基本的動作である「走ること」が軽視され省かれる。

その結果、体力の減退をきたした。それ以上に「走ること」からもたらされるバランス感覚の減少をもたらしたのである。

このバランス感覚こそ人間が人間である必要条件のひとつを構成する。それ故、このバランス感覚を求めて多くの人々は自然を求め、友を求め、且つスポーツを求めるのである。

こうした観点から、スポーツは闘争でなく競争として位置づけられ、非日常性のルールが支配する場での優劣の競い合いとして受け取られてきた。そして、一定の場所での一定のルールのもとで声を出し汗を流してスポーツを楽しむとき、われわれは日常生活のなかでの種々の抑圧から開放され本来の自己を取り戻し得るのである。この意味でスポーツの社会的機能に対して、大きな期待が寄せられているのである。

しかしながら、そのスポーツも現代社会の影響を受けざるを得ない。その結果、本来のスポーツからかなりかけ離れたものになっていることも否定できない事実である。例えば、優劣の差、すなわち勝負の結果が実生活をかなりの程度まで支配し、スポーツの非日常性の聖域は必ずしも守られていないのである。

それ以上に、スポーツとして最低限備えていなければならない独自のルールについてみてもかなり管理的色彩を濃くしている。それは日常生活を支配する種々のルールが、人間を拘束し、自由を奪ったうえに構築されているものと一脈相通するものがある。もともと、ルールは或る意味で人間の自由を拘束してはじめて成立するものだからである。とくに、こうしたルールに縛られルールに人間が合わせる姿勢をとるとき、それは日常生活での人間とルールの関係とそれほど変わらなくなる。

いわば、多くのスポーツ、とりわけ近代スポーツと言われるところの整備されたスポーツは、それをプレイする側から見れば、「閉ざされた

世界への現出を意味するのである。すなわち、一度プレイに身を投じるやあたりの景色を堪能したり考えごとをしたり、他人のことを考えたりする余裕は許されないのである。そこではルールに従って自分の技術・パワー・スタミナを駆使して相手よりも優れていることを証明する、ことに専念するのである。

これに対し、「走ること」は「開かれた世界」を自らつくり出しその中に身をおくことによって本来の自己を見出し、自己および他とのコミュニケーションを確保することへの可能性と信頼感を意味する。それは自己との対話と思索の場を確保することである。

こうして、「走ること」はただ単に肉体的健康に機能するのみでなく、走るひと自身の精神的健康および他との関係における社会的健康にも資するのである。それ故に、ルール性と競争性に乏しい「走ること」が、人々の関心を喚起し、足を向かわせるのである。人々は「走ること」によって自然の中を、或いは路上で自由に振るまう時間と空間をつくり出し得るのである。そこに本来の自己を垣間見て、その魅力に取りつかれるのである。

## 5 結 語

「走ること」が人間の基本動作であるにもかかわらず、その意味は新鮮である。とりわけ、社会の構造と機能が複雑化し人間が本来の自己

を失いかけている現代社会において、「走ること」の意味は大きい。

とくに、生活関心 (life interest) を現実の生活をエンジョイすることに求める現代人にとって、健康は最大関心事のひとつである。その中で、スポーツ性の希薄な「走ること」が大きな役割を果たしている。それは現代社会の抑圧的な管理機構への反抗でもある。

現代人は、それほどまでに人間を求めているのである。本稿では、「走ること」がその期待に応えるひとつの具体的な方途である、ことを調査結果に基づいて考察したに過ぎない。

## 注・文献

- (1) もちろん、管理された状況からもたらされる両者の間の内容には大きな相違が認められる。スポーツのそれは汗を出し声を出して外的報酬を求めない行為にその価値がある。そこに人間性の回復を果たすスポーツの機能が求められる根拠がある。
- (2) 本稿で「走ること」という場合、それは生活に根ざした健康管理・楽しみとしての、jogging, running を指している。
- (3) 青梅市役所の好意と協力によって青梅マラソン参加者 (昭和 56 年度) の名簿を得ることができた。この点について、青梅市役所の配慮に謝意を示さなければならない。